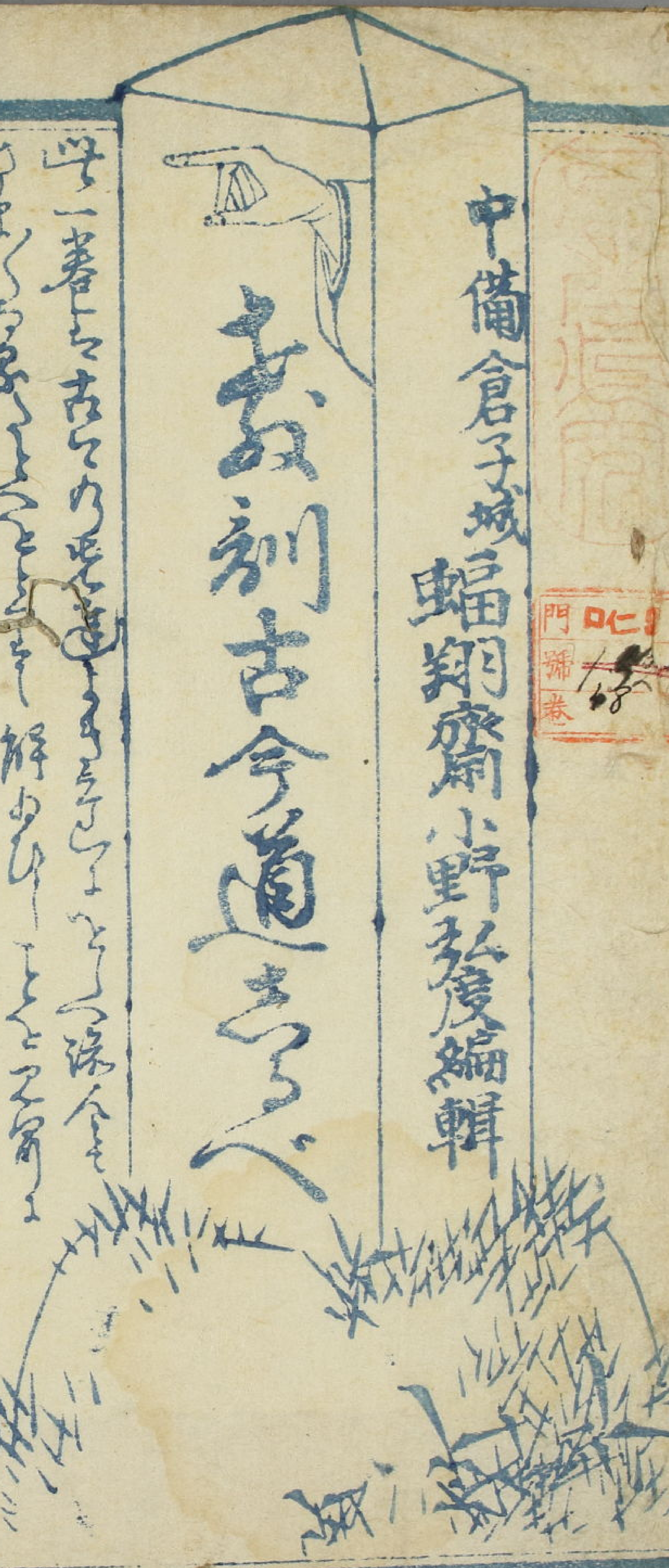
古今わかしふとほかゞみ

古今遠鏡
全部六冊
百十きこし

ロ9
48

中備倉子城 蝙翔齋小野弘度編輯



此一書ハ古今の世に道をしるさんとて諸人をすゝめんとかよへとも解かたしとて一冊に作りて書くしく書ハぬかゝる町人数をまとめるをこゝろひ出来るはる名をきく大人を人まなひてを抜て解て事手にしたかひてよめるやうにいふ事を人々の為にかくなり

舟尾ゐ 浪花堂淵龍述

丁酉九月中備倉子城市人蝙翔齋小野生来訪余取囊中一冊子贈余曰此冊也余所為平用心而成也近日刻將梓於是請於三備名宿以序若跋先生盛許之另余之奉也是以未見余乃披而閲之題云教訓古今道志數要通論經諸集文以為民之徳所經高而諱之說忠孝勤倹之事閲之郷人固無不知也余雖生無学而不讀且

兒童初學莫不先之於古法書而已
生又請余曰既有田信庵亦為無餘此刻
之成也遊囊甑無遺遊海内從授同志
以此編者讀之訓之亦為己也實莫善焉
焉余因請果然曾孝子足跡所及自邑
之都之人何從而謂之誤見所著撰收
錄蓋富歸囊所收豈惟區區一冊子而
已耶余將謀之孝子之歸日以為序云

之亦大濱也遂書其之

岡山　樫庵老人萬信誠撰

ひとゝせのさうしを持来てこれも学びぬるをとせよと乞ぬ
あまり年老てはかるてうちつけふくらえかんもいとふへしと
しか筆とりてあるみるひとつ見れは遊を世にめて
こゝの心の佐くしてかみけんとくたとへすそのまゝ
つゝくるまへ十二段の信あてもとむいそれ年数ふとの
あつめるとかかにあれたとのこゝろさを語てひろくつゝ
うけて筆かきへ京北へあれ姿あるかの新女かたまへ
まほ後ありへくかふとしつくしかものぬ彼さし書かれぞこまをと

ほんらい人々ふ伝ふ事よくも思ひ志んしあはれものつゝ
あけはく申しそうにおもてもふ如信くふるる處へくよとふさ
さしへ今にこなるへし此書は山よりこの大神の志やまれ給
たれは里のうちにあとよ近ふ金ふ城の里人小野な成といふ
せんの大神よ其の其の跡乾しらさをいふこと依たのまれ訪ね
たれのみ手あいけ給ふ手みかひの神をいさなひかしきそ
その筆をおみつ画書に志るすのみそしるしをかそ
いとせたふらし御御前をす

某のちくしを以
かく志るす
松齋 書

近世文人才子或刊行詩文要
圖名勝者去一覽歷然在目今子
小野孤度朴直而好義趣遊歷
諸州二十餘年以見所見影
倣諸家手稱筆於其意人之
覽輯為書全三冊畫情園寫

俚野之童蒙上木於廣四方
所謂諺名家號之參之為嗚
呼孤度此哀亦支更國文家
古是非得失何如也因為題
安永六年　丁酉仲月
七十七叟浪華道人

小野浩右衛門輯和歌之有益
乎小學者名曰古今彌摩仕琉
辭蓋祖述乎島某所説也
而体之以謹演訳便里巷兒
女諷詠易熟耳　若夫
小學者至於其初之歌法

書所輯大係孝親忠君
則於教諭女児宜可無少
補哉時天保丁酉秋八月
中浣天遊道人題 書
高居士書

古傳の中なる倉栄の里丸山神ひろのりが
手に路ゐきまくの覆ふして綾錦あやふ子折の
よ家人におもんなる産業のため書籍の
國内諸方にあまねくおしゆる教の人の数て
あるべしよ假名文歌の章学の事にあ
いやしきき諭しおろそか從来のくつし誤り
てきらるを書集めつゝ凡武士の心にとそ
きこえし千里の馬をも今まつて見んとそ

人として求めしに例見ゆることなし其
馬教ゆるもせんなきへうして骨を求て帰る
臣ありて是をしかりて馬のうせたるはいかにやん
其人馬の骨の貴きをもつて五百金にてかひ
いかもしらん其事世にきこへは生たる馬を
得ざらんやのおもとして一年ならずして千里の
千里の名馬三まで得させけるとぞ数寄あれ
好めるものはおのつから集る理にて教訓又

教訓は誰しれとも好めるとせよかしてや教
のまことおほく古今人々の教ことも幾無言
きゝてきくる人の多きのまじとくらん其中のよき
を撰いて此度一冊とし三編の画工
とうにもひて絵とし三編のうちをきと
の博士たちに序跋を乞ひ教訓古今
道しるへともなりぬ人の道を踏違ぬ
やうにとの所存の老手著すもの

小さる筆をさしぬらしてこを認よ
書けのまゝ見るて　五兵衛

鶴翁名嵩翁字城商人也
間者東讀回余以賤繒帛業
走于四方殆二十有四年嘗所
見所聞有益于敎訓者輙輯
録之言有所不及別使畫人描
之積爲一冊子名曰古今道志論
叙今大半上梓將待衆緒而記
功三備集之先生既許作序跋

請君為是序採囊中出冊子來示
讀之錄識條米國雅俳諧狂哥
贅語雜駁乎編中而貴言稗
多是鄙俚猥褻雜然有與道
契者鮮以心學家者流之善化
固執一偏之磐山鄉修設語可以
庶乎以吾當是之時無一道識遂
乃失路倫大洋中來乎知矣豈

達論道識之俚語等然則此
冊子可謂導世人之道識矣
題編名果不虛其稗之鄙
俚何妨教訓乎況為雜養女
子小人固視耳雜而易通曉則
有補於世教不為不多積年
集錄善心從乎也矣癸首所
揭投筆和歌吾藩　開祖公親書

与翻刻所以為鑒誡也余有感
于此因為説其来由翻為遷
悦而去既而余熟回思人惘惘
一見生憐憂志亦可素也所謂
鉄中錚々庸中佼々者不可以罪
常市井人見矣姑綴卑言俾以
為序應其請耳丁酉縫月書
於五雲樓中　蕉窗葉〻書

令聞廣譽施於身所以不願人之文繡也
然人皆悦文繡而忽於聞譽則世之所好
異乎子輿氏矣小野弘度倉子城帛商也
其所鬻皆文繡綺爛若故人争購之而其
行販之暇輯歌什俗語可為訓若為一小冊
欲以變其所鬻齎冊於四方俾之人観冊之所

載諸忠孝義德服而行之則聞譽之施於
身無疑而世無子輿氏則恐不如前日文繡
之易售也雖然商賈之習唯利是視務
進時好而於度獨反是而不顧其利斯足以
爲奇矣因其所謁余書置于册端書以與焉
天保丁酉臘月松山山田球書

松翁爲小野生所撰一册子
來求余題言披讀之則
强聞篤之論語俚說而
及孝悌忠信並物録成書
善之道而歷以曉人亦爲

寔補于世也余乞之以見其為人
学之云爾謹序云
丁酉臘月　福山　蓮阪完

倉敷の絹商人小野氏弘度ぬしのいへらくことし
ますゐさくやあふみの田もものあこのまひ三國のそら
ことふ絹ひき組てゆきつゝへぐうちにおののこと元え
やまひものひやまてうる云いな見もし安からしてよ給
らえしく世人へるをとしつるは見侍ますて
かさねみてるあつめ粒とてとりやまもつるむきと
思ひて西守のいるとてたがしくい人にたなせしきろ
せもさむるひまう世のしてまろたがしくめでる

もえたちかくにに二國の人々にも後ハてゝ下にし
ひろきむくみりいれたるとりこそ山吹の色なる翁
かなれるこなりしなれえむとうつるゝしりかへかへりきて
まことみつけれ人々なうちひつむしよみあつまとくえ
いつもけちありたゝ人々にしうつひてたえしくよれ
ここふきゝやむしくとおつふおりひまゝ細してよと
とそきこえかくるむ

あふち夢の光海なる人

凡生乎天地之間大者以大智
自得小者以小智自足諺云蝙
蝠雄飛于無鳥之里誅乎是
言也蝙蝠鞠齋弘度勤苦二十
餘年編輯一冊子欲拈以翱
翔四方是亦天以之巨蝠也余以

忠孝

文字章句唯伏于蓬蒿之下豈亦一鄉之小幅也雖其所志大小各異所以為幅則一也故於其請序喜而書此天保八年冬十二月朴齋老人識法

五字訣

七字訣

太平翁三樂三齋小
早川贊盛敬百拜而
書壽濱多齋記

雲騎卜安林

誠

惣して人たらんもの正直をむねとし
神仏を信仰し主を敬ひ国を
憐ミ国の掟をまもり先祖をたつとび
父母ニ孝行をつくし兄弟妻子
親類眷属によろこび家内睦しく
平生を慎み花麗を不好物毎
倹約し渡世をいとなむこと肝要なり

働くときハ富貴繁栄子孫長久
の瑞祥にして家督相続の基ゐ
下迄ならんや

水戸黄門光国卿ハ広間に
御自筆にて掛させられし條目

一 苦ハ楽の種楽ハ苦の種と
知べし

一 主人と親ハ無理なるものと思へ

下人ハたらぬものと知べし

一 子ほど親ハ思へ子なき親ハ他と
見てぞ我身を思へ

一 掟におそれよ火にハおそれよ知恵
なきものに恐るべし

一 欲と色と酒とハかたきと知
るべし

一 小なる事ハ分別せよ大

かねのよ衰へうしと
一 九かたしと十分はこゆへ
と知へし
一 くゝ善悪言葉遠慮をつへし
人はたくみれ程と忘れ草の葉かれ
はなもおもき人落るもれかり
境也人の志賀より詳見えて
ものみのうへいはくよれ 海

いろたに登りてたつれ老の山
のれとのきしとそ徳しまりまろ
父母よし寄給よ法度とある尾
あさつまて老ことに主となと
して家業とはらしへし誰も
知るみなれくいよく事小
やなへきものなり

苦にとまれる今は世上に顕けとく
ほうしんやうりつひてとれ
五計
事業定まる時ハ不困
一日の計ハ鶏鳴に有
一月の計ハ朔日に有
一年の計ハ早春に有
一生の計ハ勤労に有

平生の計ハ家内和睦に有
かせへあれかすき様かぬ行のも
おこめしいふしうきしかれ
寿命も短く御くはえくはかの
わすれのふくらめとまへよ
よくも是いつおもひまゝく
まことにひてくめしのうまさよ

喰物(くいもの)と大事(だいじ)とすれハいのちのよ
見えされぬ物ハ有(ある)まし
かくこの料理(れうり)もひさしきとも
きわらぬ人(にん)てあらハかうし
家(いへ)ハ小(ちい)さくとも人ハ廣(ひろ)く国(くに)のうちに
天地(てんち)と治(おさ)め一心のうちに三界(かい)おさまる
苦楽(くらく)も人の治(おさ)め所(どころ)よりさだまるの

官(かん)も人の治(おさ)め所(ところ)まて金殿楼閣(きんでんろうかく)
ぬくしよし歓楽(くわんらく)するとも
心安(やす)し粗(そ)食も其(その)分限(ぶんげん)まて味(うま)し
貪欲(どんよく)世帯(せたい)にかくれとこゝろのうせ
こしなかり
かゝりみな冥羅(めうら)のちまきの世(よ)まかりよ
羈(つなぎ)うこしていのちもかな
ごふてしもかし大事(たいじ)みよりのハかなし

嫁(よめ)なしといふとも実(じつ)ハ外(ほか)のことなん
何(かよ)ぞも三番叟(さんばそう)ハ大事(だいじ)なり
たいじとふ心ハよろしからや
し腹(はら)川にも其(その)水(こゝろ)とたゞ流れて
むかしの志ばしく萩(はぎ)の花(はな)は
らんとうによりたてひゝてはうたれ
世(よ)の中(なか)ハ何(なに)の為(ため)ともおもへども
めぐりめぐりはしりてもとくしど

孝(こう)行とはけふとんよらんき(く)たく
いはゞこへいてもけふハたまし
せんけんの行へも国(くに)も忠(ちう)を孝(こう)
やうひてこの谷(たに)のらんは
がんだい鼓(たいこ)声(こゑ)のあれさが見やうくな
すとふ親(おや)ほし親をかりくみて
孝(こう)うとてハ忠(ちう)も外(ほか)も別
よあやまらし風(ふう)きぬ(の)ハ久(く)らしる

忠勤をよくしれバこそハもし
ぶんかうしまのなかぜといのかなう
九とやめて故とほしくしめ
悔むなよ悔むんほそのまゝに
まことのこゝろたしかなく有
りんくと返事られしもほまよく
かりふかくあれそふへんし
行ハ手もさつまぬよふがいで

ゆうはやふるりのいがかな
三寸の舌て尽のかうしとほ
商のひとまつかうしまひそふ
念仏のかしはゆえまん中派
庵てらろやしまきつもはゆへ
六まいの女れまことさんおそろしや
二枚の舌て人とうこなるよ
怨ろしき咎えまりも舌れさき

えてハ男とはさくらさとあり
ゑれといへくらび候聞し嫁の事を
うけたまハりてかりくるしく
かくしぬきのふミぬめんの日
かんまんハのかうつてすきと
一日中は千も二分を
人ともに念仏ごも申させ
因に事なくまれほうよせよ

鴈金文七
雷庄九郎
庵の平兵衛
極印千右衛門
布袋市右衛門
はやされしもとねざめおやもちに
秋の月もにうそで氣苦労にある

此夫人男ハ父母一家無つゝまでと浮し
らうといへ見くらしめける大不孝者
ゆへ人にもけて鮮んと縁ともなくなう
弱味噌ありかゝぶに意筋らう里
きむを弱との春板なり撥の男
達といふを主人へ忠義とけくし
親へ孝りとけくし夫婦兄弟
むつましく家内和順そて無理

せん着人を勇気と人とかかり
喧嘩しかれんのくちおしさ
悋怨をぬが残念よあろ
唐も天竺我朝よかし
いのちをはかりかんてぬれば人
捷をるよなのをうぬさしめれ
うらうらしうら男ハいやしきれ
炎暑よ扇をよにもれバ涼し

涼しきハ風より風ハ扇より生ス扇ハ
扇屋より出る出されたハ銭より銭ハ
君の俸禄より出る是ぞ涼しさハ君の
恩より出るぞ恵ハあれとも指しかくば
身の此扇を動とするとも得んや手と指とハ是
父母に受たる扇を揚て君親の恩を知べし
仰ぐべし是ぞ男のうへなりあつさにも
君と親との恩のありかたさと

孝ハ親に子から
しきわの
まこふ
こゝくと
ちゝこそ人の
ますしてぬ仮に孝

玉蘭女

孝

こうしきれ
親とそままに
孫乃
おやより子に
親前
よく似き
孫や子
明りなり

慈

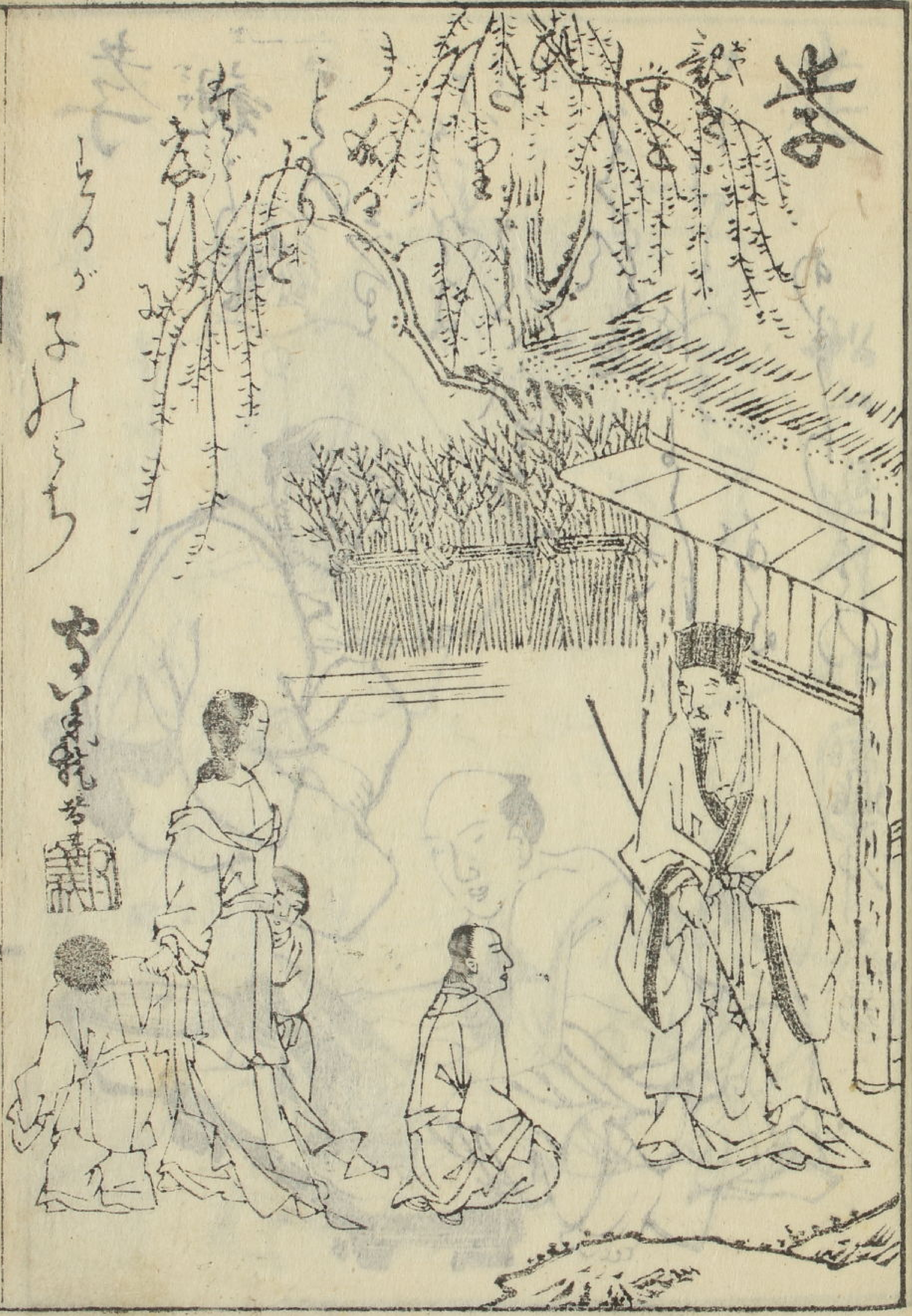
敬も愛も
辞儀もちよ
弥美母ちよ
人ハ孫や子
やら猫や
子やら

老

やこゝろ とらすわ(とう)たよ むかしいふとて 杖(つえ)をもちゐ おもふ その親(おや)

孝

親(おや)にすゝむ ぬきしまゝ まいらす こともなど 孝(かう)なり そろが子のみち



孝

親(おや)よりも

この子を

ぢゞは

うらひらと

くれね

ゆらしに

ふ

あまりの

鳳仲

老

ツイらうつと

うらうく

ゆげ

まいもくよ

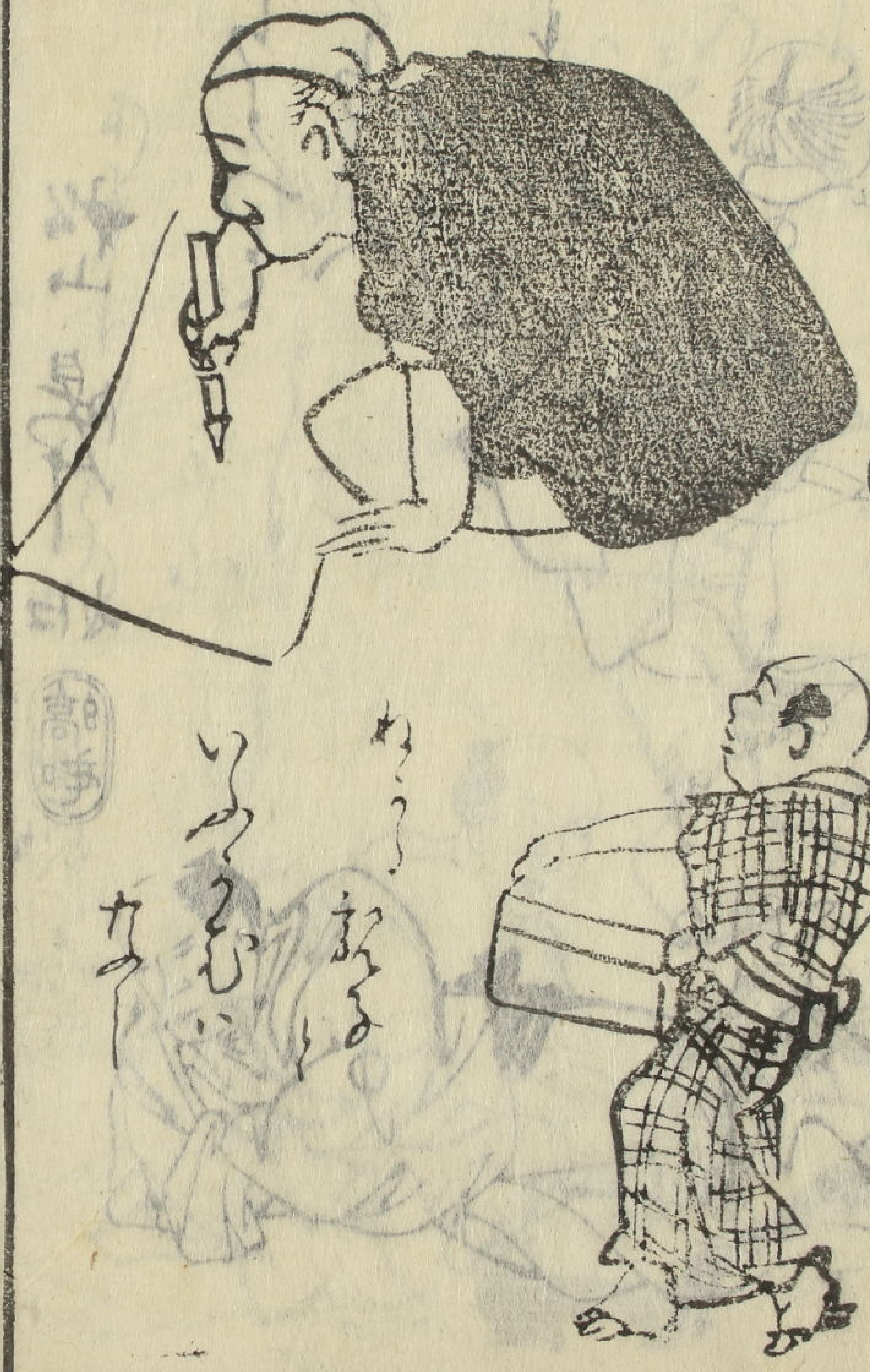
松山帰如

わやの

慈悲

孝

致おのゝく
もなくば
ひとの
他人気にて
おつる
親まで
いふむかし
かな



文晁

手

ちやハ扇を
あつみれかたらよ
こゝろなく
あつてをさけて
居なぞこしてを

蕙斎

細川三斎公八ヶ條

一 寄合てよき友 西行や徒然草の書学文じや
きくもよし おもしろくなけれど ひとや

一 寄合てにくきな
宴遊をたのしみ廣言うつゝをの
ひとの中にて 筆たつ人

一 よく思ひうく人

孝

親よしといはゞ思ふなれ 老の身の
ゆかしうそらよ 絵の月かけ

義

こゝろよく人といゝんゐきんよ
慈悲(じひ)なる人は遠慮(ゑんりよ)ある人
一 陸(りく)ゆゑし人
うそとはきく人ハ出(しゆつ)しさしあくら
高慢(かうまん)になりて自慢(じまん)ある人
一 きのよ成(な)る人
鈴起(りきとく)や男を働(はたら)かせ小食(せうしよく)し
忠孝(ちうかう)ありて発(はつ)を緑(えん)き次

一 きのよ勝(か)ぬ人
衣類(いるい)や寝(り)金(ね)庭昼(ひる)寝よ極(ごく)山どれ
日さ思案(しあん)油(ゆ)断(だん)不(ふ)気(き)根(こん)
一 うほをする人
碑相(きやう)に利(り)せありて自慢(まん)だて
ぎれしくがれ欲(ひ)ひとろ
一 利根(りこん)なる人
人をくことすくあくいんせんよ

そりやこそしらぬがよいて
此は方角の惑なりしかし人を善
悪の分はよしよしし
人知し人の身よも人ぞなれ
人とあれ人人としあれ人
うしれぬの目利そうつう友達の
めきゝするぬたるゝ妙なり

あるへそさんと
妙哉曽
きゝんとり
めんくつ
からむ
娘のまゝ逢ふ
みつこうしもいゝ
眼の玉　程とみる　沈人

川うけのせひゐきりふうにた
うれよの人乃るゝともつくや婦
するかゝり行のまゝかとまちろてな
うれしかしゐきそゝはつかさも
よの中にゐきつゝとのいつにすて
富まこと　かゝしまりとちゐ
親まて膚君のうけ恩をうしろも
そうへくきも有しきし耶

世の人の魚つらひやといふしく
君の御様かんとうか　まうなる
御召ふう腰帯も皆ををんとゝべ
きゝれ拝気みたく足とうへさる
捻ことるもたつのよまるも埋火の
はめふかしぬうちでしまう河達
親まされを後悔ちるは本事のつね
ありしと美人は　まよきがはく

あま何の無理をいふともうしろおや
いたしておけやたり老ふとも
深草元政上人の歌に
さくむとうきにもむ人はなき人
さるものこれのりとそれらし
或人ふ何が育てしたが養ふて
はてりぞしりしさうらしや
そのきけん何ぞてらや

天瀉先生語
卑は父母なり父父母のもとに
ゑみうらそ父は則親なれや
母の中小父はこんゐのいかに
見るをかをと云りまでまくも
遠とはけ恩を報ずる父にの
そのさしのひきにむしさうらん

又たまくるて容さつをなし
さしその人のまなぶところハ
目新のはやりぬきハなはだし
たゞしむ人のみならずして
りやうしみの治のしに遠かきに
ミそし薪もそのうらよぬき
雅とそしなまぬそハあるれども
さりつてまざしけこれいぬゆへ

やしされていのをくまれといろよりのら
御さうあるらいへるべきやう
歌並礼と公儀のさきて火の用心
うりもとれおて和ばの柄さま
すへてけよりかれされるたとへぬ火
ゆるんとえれいさや矯の声
排にさへらかく家のハ年をう
うつくらもれりつぬらら

色しよ事しぬすかいとしぬかし
えのことくそ太すかまれ
わんとこそのひとつて天し日も
人れたらし鬼よかまりをり
三度喰よめさへとしやうこう
わかりよきはたかきぬるの中
日よ三度猿よ向かしちてけや
まれれ恩とふくいらへ

耳もきゝ目にも見えねどいきのまに
ほとけのたまふたりしかるを
わうちかむさぼりくをよ耳も涼し
いつかぬとてしふくれるうせ
五臓中なまれよひの冰飢ひ
たらまうくらに営み死のちね
たしかあよ短命ふいといぬゆへ
よりさう智恵つよたんさか覚との

傀儡師むねにかけたる
仏ぞうも人形なども
だましつゝ

けいまくは
ひとの心の
鬼もすみける
くはいらいし
ほとけつくるゝ

質まけの
さくらはなしよ
前ししく
かちよる人の
側まもみて
まけものゝ
人をまくして
思ふみちの
ちゑのつよさ
つよ故之

まけてやるまいく
嗔恚は一ねんなりし堪忍
實意をはうらんとくれまくうに
ちつともまちどうちめくとらふ
天罰と恐れぬよのなかたまふまれ
はうたざくと婦んくわどうきもやせん
はうさ來いたきうとさつくこともあり
よまじれ柳よ風とれハかうし

氣まじくぬ風ゆりるよ柳かる
はまさりよつくにうつと竜さとい
柳よまりをよ上手とも
むやうたんのやうし浮世とひらうへ
淵ではひんこ瀬ではひまこく
世の人めいせざるすいふかもとれ
ワざまようそりひくべく
たうかまの濁りハくをにわくらう

いかくそましきハこれらけのこと
嫉妬のこゝろゆゑ
ちかくてハ鬼のかたちに化すとかれ
さればあしくも娘ともな
鬼ごとくなるハよのあさましくて
おめくとそしりにまさるもおほく
一切女子のこゝろえ
比ゆゑにハいかにもそれハつゝしむへし

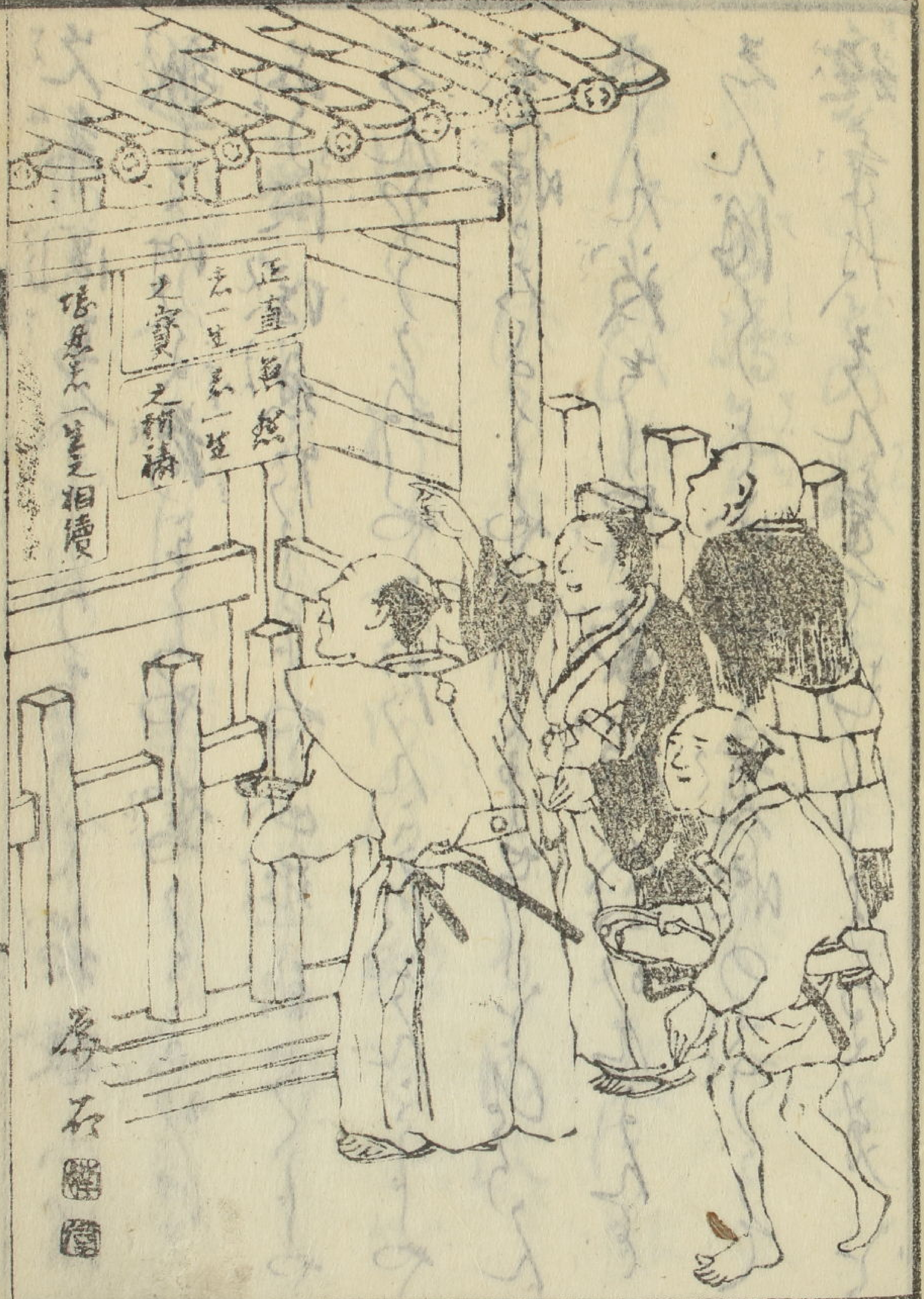
うちとみのそくましうハ男女ときに
俤よくさたく別ものかたのしく
ある手をさゝげてもちひよ
わかくハ座あれハかくしたてても
めしくつまのきれかひかへをし
いとなむ家業大かたはかどりがたく
一たんのんで寝ることなく
人まねくうへよ目つゝつく横へゆく

いつまれてのいつきまうしみれまや
いふうにゐる月日をおくりまうし給
むかしはかくされしぬれば
ぼうろくとおなじ火宅の人に給
ときといふもはうほうどうもあり
財宝ともちうせん病ひうり
いちともつもかつきあしそ安くれ
盗人の東んあれも五荒より

されとおさぬいつちやう家
金銀もつせんはうんはぐことく次
うきはそをけも石も国ばん
洗文し未とかけちくものたゞ
家のとくかまかんの洗文
みづひろうちひさくけよゐあり
ゆめまでもきやう旅ますでも
はうきてもえんくしてし文してても

うき世はひとつはぞいやしき
あや是のよしあしはのあしへども
んのわざとはいふひとおし
我夕べ教には是とはいふかすら
うき路のはつもすくへきあり
まされても麁いろでも人をひと
おぼろよしきぬきよのきよいと
心ころあるとものいわくふとも

人と慎むみちはたしえ
西行もうしもおし山もはのをさも
はらのだけさうはるかにかず
まで扇をぬくひはせと云き給ひて
かきぬく風とまれまどのさ
世は海の舟八船ありんぶ八
かぢなりうちぬとうやうがはの
きれぞ船くはくうきし



御門やかなみまひのたゝしき
うち家あくはまゐらずあり
われ手中まくてしそ世とまされ
んのこゝろ浪風すうれ
山中でうはしきのしをとまへ

遺文三十軸　軸々金玉聲
龍門原上土　埋骨不埋名

先年関東へまかりて箱根山は
越そとはくよ花のとらや駕籠うさぎうめけ
あるに江戸見物ものしじや山王祭らくしじや
えんかうねのやそでたんこんえんこどや
覚悟らたすのしやくとやせしとひらん
しん役ぎしや女花人ハえんまんと
えんほうとや直と覚悟のしうすて
経念たんえん童でもしうるき男と

亡ちしよの数とまうしても
手習先生めいろはくさに
えんまにひられて経ハうけ日
もうひらうのはまじるぬん
さゆくまれしへいはれど悪とやめ
珍ともをうちまちかまこちかし
道とりよとけよ道つまうあきき
はきくタおめうえんまさしとしき

天満宮御詠

こゝろだにまことのみちにかなひなば
いのらずとても神やまもらん
とくいのちのうけされと
まつくなふときはかならず御を

若一止戒常之信其明
萬心通佛心見天心合
悪知起逆覚捨本安位

或大将のうたに
人は城 人は石垣 人は堀
なさけは味方 あたは敵なり

韓信市人の股をくゞる図

ゆく末を海となすべき
山みつもしたげし
おもくのしたこそ
くゞりけり
名も露けし
しらうきぎ
ともかくも
将をとる
秋はあるまじかり

鳳山道人

そこなふ事あらん

大酒大食は　脾胃をそこなふ

色欲淫乱は　腎をそこなふ

喧嘩口論は　身をそこなふ

家業無精は　家をそこなふ

金銀放埒は　宝をそこなふ

我人不和は　交をそこなふ

身体髪膚はうくかたけくのた
孝のはしめ身をたて道を行ひて
父母とほうしんする孝の終りなるを
父母は慈恩で生し身をやぶ
らしともかれはかしうく孫へ
よの人経文をぬいてうけとは
わかうやしけんのまゆよおさめよ
まうひすたとはそれまでゆうの八

ちうくは令のゆきやいふらん
太田道灌のうたに
いそかしき身はぬきさしゆゝとたひとの
はまりもうつのちられはひも面
先朝紀し人目しま帰中らく
仁義うく熱し人とまてかなさは
富貴は家とい事し
身際をもいろはきとよ

たのまんとするものゝいやで
なくとけてよき人ハもちたれ
老人ハよく孝悌ハなをまつりか
せられたゞ本業の末を稼ぎと
嫁いりしても貧すとみん毎
我町人幸ハ正月二日ハ年始と
して十二月大晦日ハ大家に出て
是をたがはしらの内の方え渡て

主人家へいれまいてかせり
奴ハちからしてはんあまりそのかさハ
たゞまうかしてもきこのひとつれ
まく嫁いれのことふつかくれ
はりうまてたとつとめて
すくとし火宅の世帯とやくうちに
にひ所とかうあとはしきりてや
ひとりでまハよくすみれ

かんなをましきハかなし
仁(じん)あまれハ弱(よハ)くなる
義(ぎ)あまれハかたくなる
礼(れい)あまれハへつらひとなる
智(ち)あまれハうそをつく
信(しん)あまれハそんをする
何(なに)ほどよいことも中とれ
とくとれハまろかひとなるや

渡世を大事にして精出すも
邪めくそゆくも儲もよし
足ることをたるとまかせてたらぬぞ
くらして足ぬる身こそやすとなれ
商ひは忠義之れどのつとめ
且貯りいつとも勝らんじやう
未あのよをいんのあひと思ふよ
来利らしぬと祭るもいつわり

弟と郎く
んされ
濡れて
[illegible]人来
ちぶか
をふぐも
めぶか
老[illegible]
かし

閑人のよみならひしおりしハかも
ふかれたる人のこゝろをとめて
おもふすひのあけのハまゝたるをる
これはつかハれしもつのよや
んとうら浮のおはよう弟とそなへる
おおしり御くにおもねハ風の命かな
なとかひとやしてやし遠ハさえ
人はしまさで候か紅なれん

女性やちもはしもいのみたらなを
そめてい奈ハ親もとらさぜん
大婚の人まハ姿まをれてかは
まのさかぬとれハ男まえより
うちよけてたかひまいらぬよしされ
つまてころも人のこゝろも
世の中の人のんころそくの
火めさえぬうちさんやとれ

漢代ハしらず候へども
わがちやうハまとのころハ時しげきに
月日のゆくたびひまなく春ハ花さき
秋ハもみぢの目出たく治まる御代の下
ちハ貴も賤もあまねくよろこびあひかよふ
いつものハ凡人賤よりたゞちにくだりて民
風とせんや俗奴僕りかゝや召使
とれまでの鏡やうるまひや芝居

物見さかりの遊山かなぐさみものは海
大平のゆへなれや飢ともに之次
くらしも事いかなくてほとぐれうま
まづそや耕作もれて田畑をも麦
菜粟稗いかなりとんきせになほ
出し野にかれ山あるき暮てても
ゆびさすのうわのりて沙汰をかい
いよそもひろき世理なん申て

さればはつくひのあけばはなのさく
はつはな鶯のなきてはなり鶯のあはれ
紅葉しるまとやうらしかもとやうら
もしる魚つくし一せんめし日らされ
たのしみもこゝやどはまのさけさえん
はんさんよしはんせうけらさま
鳥の雪へ浮かくれ神垣のさひ
色しげくうらみつく花かはりへ

藏書ませとはさめてうかんさ
んけとらびくをされされ
池竜色のあへせんかはらそうか
されてしもしう亀つ緑はくぬ
うらいつてまうひはいくぬうし
のんでまうひくはまぬうし要ふ
てりのひきのとぬうしすてたお
すらはんさんよし親まする

まづ婦中よく天下太平に治まる
かとおもへば、にはかに月日とゝもにかはり
みだれしがごとくくもりし
地震おこりしよ
世の中におこりハぶしんとなり
ゆきとるまでもとし乱はひきつゞき
むつましきもどもやくにたゝ
いましまるはしらひ風とされ

以身教者従
以言教者訟
それゆゑ親の身もちをよくすれば、わが子
もおのづからしたがふ
明明徳
これ人のおのれのめいとくをめいめい
みづからあきらかにみがくべき

天地と同うくん時
地の御恩は千万無量にして何に
たとしといへてもつくし難きす
しら御やぬまけいぜしぬ元のちる
人のとの御うとてさのこ色すも花
されともく其か人にわり
人はたゞまめてまくてやりしそ
とく桜のやうよりしぬきみ

円通和尚御瓦の銘に
人生世へあるまかなはねば人は世渡りも
艱苦をしのびつゝかしこく食を
もちひて地気とわすれくれば
おもひと憂れはつきし家をかれ
たしなみはおのこ孫子兄弟様
よろこびは愛あれどあいさつよく
くしおさんとのこゝろして

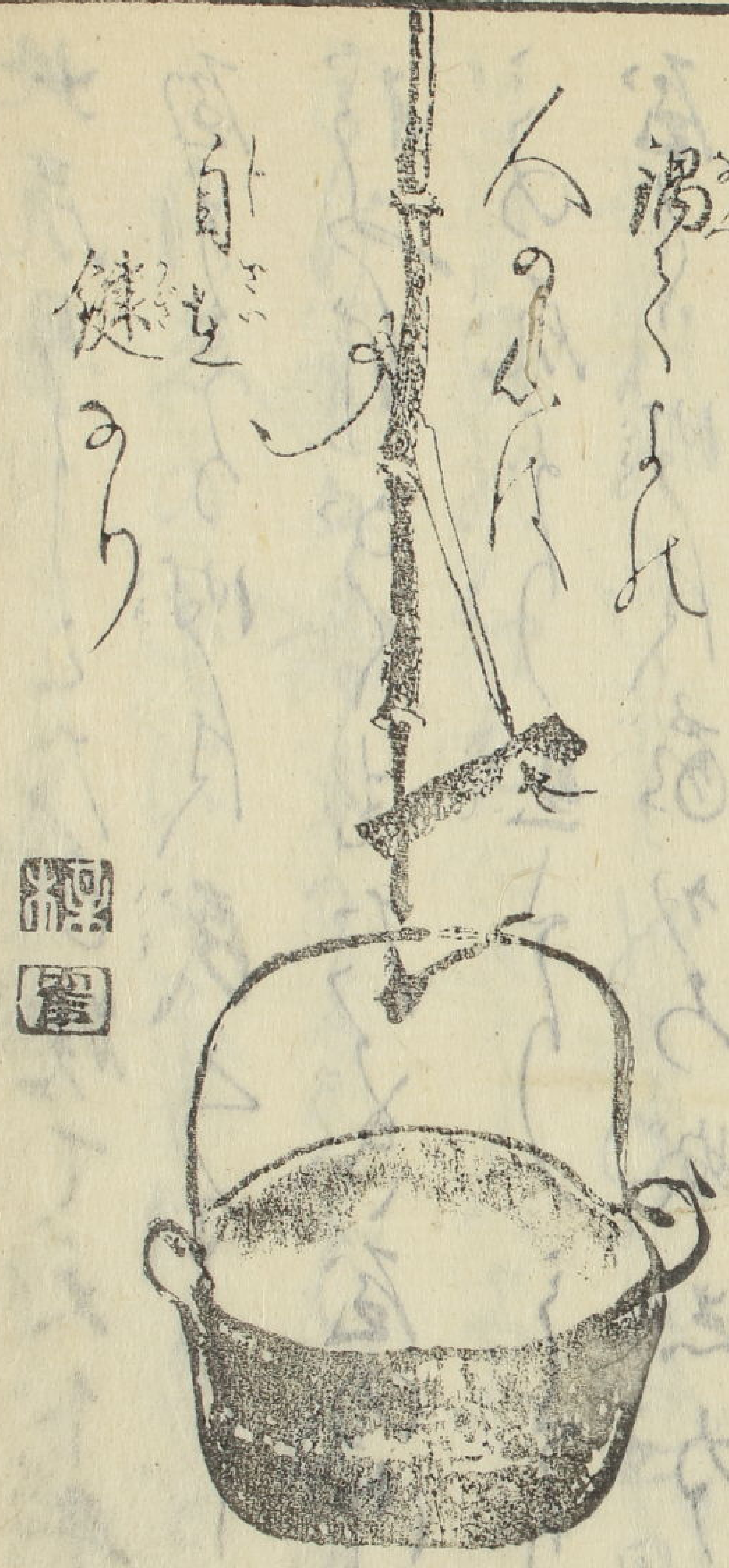
はしめよりまで
父とたのまれて身にあまるまて
ら綾のこゝろへ入れかうれと
よのなかんひろれいめつちて
ゐしかば四海も内のかくれやい
御神代のむかしより今にいたる
てうちもりん廣く天國と
治めましましてハ家ととし

かみへたをにしてき宮仕しれたり
んかこゝのお爺もられ見とんで
ほりせきなりされハ麦も
まこも今銘も見なりいでたう
あかしかきれ自豊おのいさ奉
まそく及たゞめ乃いと稀ぞへ
こゝをと

さい田信用の
我守り
畑も田も
打出の
鍬や小槌
らしき

白川慶定信賛

よれは爰に
はしきまは
るる
湯くまれ
人のこゝろ
自在鐉あり



此凡日りこたび焼て天下平也
屋りぎりの時は民くるしむ
おかけかくもたうき屋の御製も
この凡より出こそうよ
屋く時は飯かろ嫁きかく
やうぎうしこれまじこりすく
かうし吉凶貧富これあるとく
けり

うち方ゆえさく
文れこうえ
屋りおみんとらえんれ親の
それうしとれをハれ六月
いちゃ子れんへえ
まけをふうやうえそし親のうち
れ為の下にしとけりとりく
一母れくんえ

一それ不和のさいしよをたづねて
とくとみるにまつ知や
母と舅とるすのうた
いかほどおやのめしいハ子どもなり
子どもしんりかするが孝なけ
舅れうろうえ
不便さや自分ハおやとかりとて
他人のまれとたのむ花よめ

義理もけり血脈ほくいさ嫁と
そまりよそろハ人非人なり
きよめをてうけひまれいきまめの
一家一ろんうき縁より縁しぬ
ハ嫁のころつへ
じう子のさうへといのつころつけしハ
ひざとりくりせ家の元祖し

おのが男よくもじがくもんの
やねうしけせよ、しものほうと

姑に對する嫁のこゝろへ

姑をまことのはゝとおもひ
しんとくをいかにつとめよ

婿のこゝろへ

婿はよめにひとしく舅兄弟すら
中のよきものはなくものはこれなし

姉のこゝろへ

いもうと兄弟をあはれみむつまじくせよ
おやめいとくとさへやすからみの

夫のこゝろへ

夫婦とハ天地にたとふるものなれバ
かろ／＼しく縁をきることなかれ

妻のこゝろへ

まづ親の御前をもとてもちいんで

ま婦くらしゝ縁でもあれ

百姓のこゝろへ

は年貢ハいつといふはなとちてゆけ
かけちよたくりしかんさへかかり
百姓まもりて志さんにいれよのゝ
こゝろへそ民人ハ国にて

細工人のこゝろへ

ようもれ見目先のそんハ是非さす

まいくへみかけをなしハ不自由なりし

商人のこゝろ得

商人ハそまかしまことも無利下れし
くらひこゝろのものにあつまる

職人の心得

人の子ハちいさいかほど大事なれ
そのゆくすゑのためとそ孫ハ

育子のこゝろへ

油烟(ゆえん)とれ月日のたつハいやひよの
たをのつもる年めしち
男と添つん也
すかハいかつくよめしいう流くて
さしゆのつも見くめよそよ
世を交(まじハ)りう流へ
祝んしろまいつく礼儀(れいぎ)ともなう
之くぬ他人(えん)へも一家ぶうせん

嫁ハ成婚書

おのづからとよくこれ悦(えつ)らくと
ねんごろ也ゆくとゆかうか男と働(はたらき)
らきよ食うましためしとこえ
此らうし飲(のみ)すほまきとそと
見んあきうしるとひよへ縁事(えんじ)よ
ゆるとよく出しきけハのめしも
めまうしか老身(ろうしん)とこりんもう宴(えん)と

わきまへしか慈悲ハもろこしともいへりと
これか思ふすとありて及ばぬす
とらふか人ハうしも世の亡者や忠と
破れし死後思ふ事かゝるを
一ぱいけりまた人一度たり色して
ぎんなりハ善またぶかるのこと
に妙要とさらへし男れぬりし
男とそこかなふかきうこの八寇く

なんかしこく食物ハ酸つらんおね
きらいのちハものゝ味ゑをまもりて
にとげるか居所ハ風雨と湿ん
ためなるの書ハよろやうよみけ今
禄を謗んするを儒経とよろこふの
志げ悲えろやうまいへ説くやう
らぬの德よろつく合し蔵ハかく
れいらぬもてをゆくそんじと萬來ま

夫婦は但も鳥は餌食をたくはへぬ
ゆへ飛行も自在なり人は名利に
ほだされて一生をくるしむもの
しかるをくやしからずしぬすとを業するか
れいりつくして人の非とこうじへても
弓浅地はわろうするにかくれなきもろ
く寵饗学文とするは理と云ぬ
猿や獬魚のうるはしかく羨や

人すといへどもみはおのまつ非をまもるを
俗な家職をえらずして後生は次に
よくし俗をかざりと学にして
世すと次よりくしせいつよのふ
みつを有恥の法は背無や唯一心の
要とめんたへ人写界よりしんもん
めへてたのりことをとめ若しくとも
いをもにのさはかくねとも

このたんめつてたむしん米の
とをうし山をく貧賤ともはづかう
すいんて悪をはなれ五常
とかなり自心を人生者必滅會者
定離のことわりと不縁にまかせ
縁不思れあり
若きものしめとくうしはまうじひきよ
ものゑんハよしそれはさゑはよろ

大家十来
富貴人　慈悲よりきたる
福徳人　善根よりきたる
無病人　信心よりきたる
愛敬人　恩尊よりきたる
智恵人　精進よりきたる
高位人　礼拝よりきたる
短命人　殺生よりきたる

疲れハ不精なるべし
貧窮ハ慳貪なるべし
愚蒙ハ破戒なるべし
其一ツなきといふハ此木薪となり
ど周まにかゝるとハいへど頃ぼうまかる盛木し
てあるときいふにかる世の人此木にまとハ
るゝ事の多く四時に根ハ葉まぬて一生
艱難辛苦此翻ま落入て其身ハ人間小

生れながらいまて悪魔外道んいまして天利の
業を捨て自然の利をはかりすと心得ん
人の為と世をよのとんゆて利欲ゆと欲
身に及ぼしたるものとそすぞ先祖より
傳はりし田畑家財といへども済ぼ
さためもとれ親兄弟親類も
見ゑるされ身乃害ぞも猶かなさやう
にかるハ此ぞくえ乃きれまぐかゝり

世の中ハ四民農工よ分れ
商人のうしにも工よかし
いましせも見もそしもあれの
花ともいはれ家をもてなす
世とまもる花ハしらにかくふ
よくれあさせとゆけとこへ人
人まて人の心のかよれひとよ
しらちハ人よりまさりて其の

分の為よ力とうしむいまうひあり
うれ分れこしでけりさ分とよう
気もでなくれとめハさうく家うもく
食細くりして心廣され
古とより五穀しかすめぞり
わりやのこしこうとふぞ其事とあれ
道まえの兒より知るを早くよのし
わりやかれときん親も同前

かどしてよくしるハ無礼なり
またいかでも清気とうしへ
けん貌くのでんとしいふを鑓まなうて
うしへふくろの紐のしめやう
年よし此鬼ハいまめでもいやも志よう
大きそっれハ海気でいぬまん
のうつきとる良夜ハうさ若くとして
偏よりせぬのり不孝第いち

酒だくら放埒女あそびなどかりうとよ
世間とつくいふやの首りを
学文といふもまよよ孝のさめ
ならやとえんとそく家のうくえん
手を足もうんでそしもつて此しうさ
きのて御礼して母の家やとめ
賜りし身よ疵付けてもじよのう
おやへ対しで何とかいふもの

種(たね)うの命(いのち)をうけて養(やしなは)れ
名(みやう)のれくろうして恐(おそ)ろし
支(ささ)はいつぎおはすんとのでもて
男うえをはらし親(おや)を敬しあく
く源をみうよみぞおはそこあすう
わのえ川をとどうの陋をさよ
まれとりきんさんくきそていうく
さんぜんせんえとのうよのかん

うつくしき世の人
修るゝ川の清きまへ
うしふてしもさかへとんかるとと

圭雲

手も出さず
かしこまりけれ
尾も出さじと
男子の鑑め
かんにんまん万年

手嶋堵庵

西岫散人

切問當讀實下先生道ニ諸翁之
書嘉其能以界正琢吾務了既得是
納諸孝弟之域於聖人之道雖微察
乎甚病諸然由是而巧焉以示先為
支郷里吾人也舟尾屋治右衛門吾
備中倉敷人也亦觀其能為豊以示之歳
于斯屬於治右衛門處弘度擇小野早
歳服實遠游四方途云々及至於吾通

即錄之見以為頭一日來示予曰僕嘗
今也何敢以文字求讀但其志竊有所
慕是出於其專心三十餘年之力若
非唯巾笥獨衆之亦老矣書亦朽
將焉親舊勸僕急上之木亦云鑱之
巾笥寧如公同志人成其子弟僕以為
然也於是又生煩能盡謄寫復圖其
間以適童幼之娛歟使其披覽無隱

再循不為不復出夫子路就其家宅
也先生請章以此意見叙焉予曰厚
矣哉夫子之用心也雖然亦不可以不簡
夫亦不嘗則知其約而終不達是以
古之善教者其言極簡而其書教
者亦見於曾子貢孔門之高弟也尚
且請從事之功於一言定公魯國之
庸君乃亦能問與喪之由於兩幾

爲称古人之辭寡學人之辭多子姑
黜寡子辭者子所輯庶其可乎
或曰是然彼固謹貫人也觀夫與會
所值一物耳然不の不易陳之前聯
其能釋也唯書亦然覽者舍凡
意取之可矣天保八年丁酉冬
十一月　葵園小李廣之敍
男完之書

吉備の国（備前備中備後三国）にてものまなぶ人繪のくさの花のかたちをかく
のきりにてふみこのまり　つくりとしもまきてうかひかれは
文又はおとしこのきてえんさせしおぬその人の名とをかんとみに
こと彼すやときやうれしきつかねてこふにかせやりやうをから
あきてその名をもまきもあくしきのなどのとくふさわきしさらく
吉備の三国の中にをあかしおのめとくうりあきこは白とかくをよし

醒廬　備前岡山　萬波甚太郎
松齋　備中宮内　藤井長門守
筱舟　同鴨浮　西山孝蚰
天遊　備後神邊　菅三郎
耒齋　同　北條退輔
樂々齋　同　小早川文五郎

秀卿　備中松山　渋川要人
蕉窻　同　眞田庄藏
球　同　山田安五郎
蓮陂　備後福山　今村左橘
光海　備中笠岡　小寺監物
朴齋　同倉子城　神崎廉平
廉之　同笠岡　小寺帯刀
完之　同　小寺覺兵衛
筆者　備中足守　木下庄太夫義明

雲鴫　備中長尾　小埜貞三郎
玉蘊女　備後尾路　平田章
金峨　備前児嶌　千葉哲藏
怡雲　備後福山　杉野氏
泰嶺　[redacted]
守義　備中鴨方　田中茂太郎
鳳冲　同倉子城　植田兵平
蟬如　同松山　栗野龜
文藻　同　下村五郎左衛門
鷲鄉　同倉敷　佐々木共五郎
載月　同山手　宮岡惠十郎
中岳　同日吉　守屋俊平
國華　同玉嶋　中原利之丞

孱石　同笹沖　井上真澄

烱邪　備前岡山　梅仙藏

鳳山　備中笠岡　辻彌次郎

猩々庵　同吹屋　白神元七郎

周得　備前岡山　永安氏

雪居　備中長尾　善海寺智賢

可堂　同倉敷　井上東七郎

同松山　粟野良平

慶雲齋　同倉敷　小原氏

雲岫　同有井　河田仙之丞

備前岡山　藤木類二

彫刻

同　吉田恵吉

備中[illegible]寄　原田萬兵衛

蝠翔齋小野弘度

天保八丁酉秋

備中阿知郷倉敷

小野治右衛門

蝠翔齋弘度

藏板